

3.11 半年後の福島／被災地の悲劇をどう受け止めるか

谷口吉光（秋田県立大学）

「ここはずいぶん耕作放棄地が多いね」

運転している農家のAさんがつぶやく。そういわれてみると、車が走っている道の両脇にある田んぼにはまったく水が入っていない。

「何言ってるんだ。飯舘村は計画的避難区域になってるんだ。作付けできないんだよ」

後部座席のBさんの言葉に私たちはハッとされた。ここは福島県飯舘村。今日は東北各県の有機農家が福島県の被災地の実情を知ろうと企画した学習ツアーに来ているのだ。

計画的避難区域に指定されているため、村にはほとんど人が住んでおらず、田にも畑にも何も作付けされていない。ヒエや雑草が伸びて放題に伸びて、その背後に見える家々に人の気配はない。そんな風景が延々と続いている。

「半年放っておくとこんなに草が伸びるんだな」

「自分の地元がこうなったと思うと涙が出るな」

私たちの口から出る言葉も重く、とぎれがちになる。現地に来る前の想像をはるかに超える原発災害と放射能汚染のすさまじい現実、みんな打ちのめされた。

車は地元の有機農家Cさんの家に止まった。Cさんは避難している福島市からわざわざ自宅に戻って、私たちに話を聞かせてくれた。

村長は「2年をメドに村に帰れるようにしたい」と言っているが、「早く帰れるかもしれない」「いや帰れそうもない」という気持ちの繰り返し。飯舘村は冷害の常襲地だったので、米と野菜と牛と花の複合経営をやって、「飯舘ブランド」を構築してきたが、そこに3.11が起こった。政府は大規模な機械を入れて放射能を除染すると言っているが、山も含めれば村全体の除染なんかできっこない。「ここに住み続けたい」という年寄りも戻ってきて、若い人や子どもは放射能の影響を考えると戻ってこられない。そうなればいずれ村はなくなるだろう……。

Cさんの話には私は何も言えなかった。何と理不尽な話だろうか。原発事故によって、何の罪もない農家が農業を続けられなくなり、村に住めなくなる。そして村がなくなる。そんなことは絶対にあってはならないと思った。

特に有機農業は地域の資源を使って堆肥を作り、土作りをする地域循環型農業である。有機農業も、里山の復権も、地産地消の運動も、みな地域の自然が穢れないものであることを前提としている。原発事故による放射能汚染はきれいな自然を汚し、その価値をすべて台無しにしたのである。「原発は絶対に廃絶しなければならない」との思いを新たにした。

しかし、福島の農家も打ちひしがれているだけではなかった。二本松市の農家たちは「ゆうきの里東和 里山再生計画・災害復興プログラム」を作って活動を始めていた。私たちにも支援の要請があった。

同じ東北の地で生きる者として、福島の悲劇をどう受け止めるか。これからも考えていきたい。